

芝本遺跡

Shibamoto Site
The 21st excavation report

浜松市教育委員会

2016年6月

Hamamatsu Municipal Board of Education, June, 2016



例 言

- 1 本書は静岡県浜松市浜北区於呂における芝本遺跡の発掘調査にかかわる報告書である。
- 2 発掘調査は、宅地造成工事に伴い実施した。発掘調査は、株式会社ヤマセ不動産の依頼のもと、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行った。
- 3 芝本遺跡における発掘調査は、今回の報告分を 21 次調査とする。
- 4 調査にかかわる期間は以下の通りである。
発掘調査：2015 年（平成 27）10 月 19 日～2015 年（平成 27）11 月 6 日
整理作業：2015 年（平成 27）11 月 9 日～2016 年（平成 28）6 月 30 日
- 5 現地調査は、和田達也（浜松市文化財課）が担当し、坪井里恵・水島絵理・熊谷洋子・小杉直孝（浜松市文化財課）が補佐した。
整理作業は、和田が担当し、坪井・熊谷が補佐した。本書の執筆・編集、写真撮影は和田が行った。
- 6 調査にかかわる諸記録および出土遺物は浜松市文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる方位は真北を示す。標高は海拔高である。
- 8 遺物番号は遺物の種別にかかわらず、連番を付した。
- 9 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りである。
□ 弥生土器・土師質土器 ■ 中世陶器
- 10 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。
（財）浜松市文化振興財団→浜文振
教育委員会→教委
- 11 出土鉄製品の X 線撮影撮影にあたり、静岡県埋蔵文化財センター・大森信宏氏の協力を得た。

目 次

例 言

第 1 章	序 論	1
第 2 章	調査成果	5
第 3 章	総 括	22

図 版

第1章 序 論

1 調査の概要

遺跡の概要 芝本遺跡は、浜松市浜北区於呂に所在する弥生時代と中世を中心とした複合遺跡で、遺跡の範囲は南北 1.5km、東西 300m にわたる。遺跡の範囲が広大なため、かつては地形や遺物の散布状況を踏まえ、A～H の 8 地点に分けて捉えられていた。芝本遺跡は、21 次調査区の南側で 1961 年に実施された道路の拡幅工事の際に大量の弥生土器が出土したことで認知された。その後、1962 年から 1968 年にかけて芝本地区に展開する弥生時代の遺跡群の重要性に着目した浜名高等学校史学クラブによる発掘調査や浜北市・浜松市を調査主体とした発掘調査が実施され、2016 年 6 月 1 日現在で実施された発掘調査は 20 回以上におよぶ。発掘調査の結果、弥生時代や中世を中心とした時期の遺跡が広範囲にわたって展開していることが確認された。また、芝本遺跡の南側に隣接する東原遺跡では、平面的な発掘調査が実施され、遺跡の様相が明らかにされてきた。これらの発掘調査成果の積み重ねにより、弥生時代の芝本遺跡は南に近接する東原遺跡と一連の遺跡で、拠点的な集落であったことが判明した。

開発計画の浮上 2015 年、芝本遺跡 1・2 次調査地とその周辺において、株式会社ヤマセ不動産によって宅地造成工事が計画された。開発予定地は、1・2 次調査の成果から方形周溝墓 2 基をはじめとした弥生時代の遺跡が展開していることが明確であった。また、開発予定地には未調査部分も含まれており、地中には遺跡が埋没していることが確実と判断するに至った。

本発掘調査の実施 過去の調査成果と現地確認の結果を踏まえ、株式会社ヤマセ不動産と浜松市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行った。開発予定地のうち、開発に伴う掘削深度が深く、遺跡の保護が図れない部分において発掘調査を実施することを決定した。芝本遺跡 21 次調査の現地調査は浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が 2015 年 10 月 19 日～11 月 6 日にかけて実施した。調査面積は 204 m²である。

整理作業 整理作業は現地調査終了後、2016 年 6 月まで浜松市北区引佐町井伊谷に所在する浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。

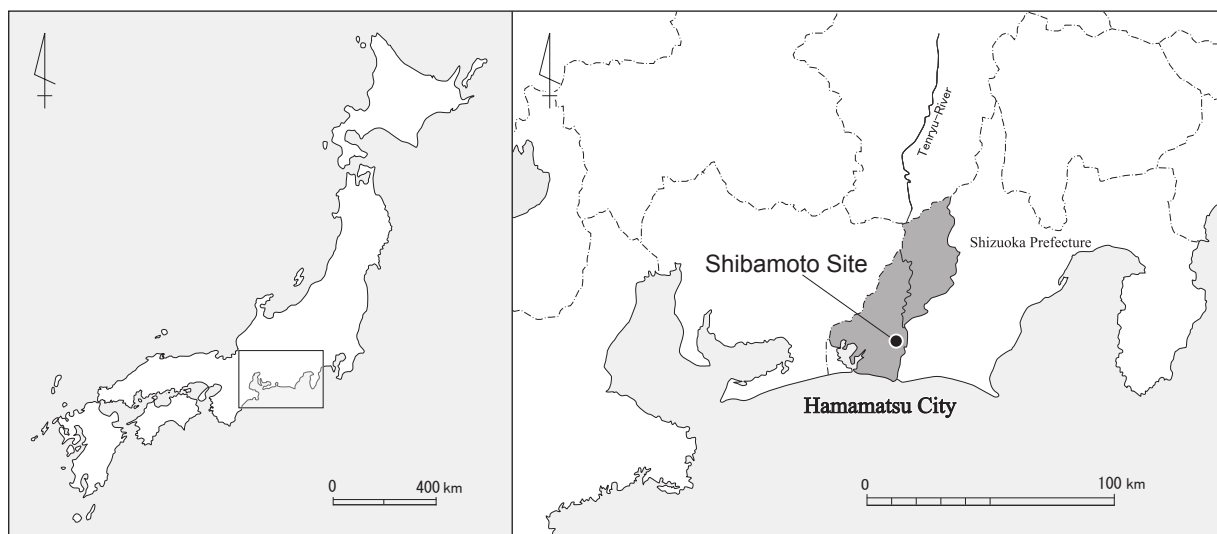


Fig.1 芝本遺跡の位置

2 芝本遺跡をめぐる環境

(1) 立地環境

芝本遺跡は、浜松市浜北区於呂に所在する。芝本遺跡が所在する天竜川平野北部地域は、北側に赤石山脈から連なる山地が迫り、西側には三方原台地が広がっている。東側には天竜川が南流している。かつての天竜川は氾濫を繰り返し、大規模な流路更新がたびたび発生し、広大な沖積平野（天竜川平野）を形成した。三方原台地と天竜川平野の境界部分には、天竜川により形成された河岸段丘が形成され、上段から富岡面、姥ヶ谷面、浜北面の3面に大別されている。芝本遺跡は、最下面に位置付けられる浜北面の段丘崖に沿って展開する自然堤防上に位置する。また、芝本遺跡の西側には後背湿地がみられ、かつては遺跡の西側にも河川があり、芝本遺跡・東原遺跡の南に位置する本沢合付近で八幡川と合流していたと推定される。

(2) 歴史的環境

旧石器・縄文時代 天竜川西岸における旧石器時代の遺跡は数が限られている。浜北区内には根堅遺跡があり、現在のところ本州島で唯一例とされる旧石器時代の人骨が出土した遺跡として知られている。縄文時代の遺跡は北部の丘陵地に接した段丘上や三方原台地上を中心に分布している。中通遺跡や梶池遺跡などで建物跡が確認されている。また、北谷遺跡では、未成品を含めた豊富な石器が採集されており、石器生産遺跡の可能性がある。

弥生時代 浜北区における弥生時代の遺跡では、本書で報告する芝本遺跡や芝本遺跡の南側に隣接する東原遺跡、高根山遺跡、大屋敷遺跡などが知られている。なかでも東原遺跡と芝本遺跡では度重なる発掘調査が行われ、弥生時代の芝本遺跡と東原遺跡は一連の遺跡であることが明らかにされた。また、弥生時代中期に集落の形成が始まり、弥生時代後期に最盛期を迎えた拠点集落と捉えられる。

古墳時代以降 浜北区内の丘陵や台地上に数多くの古墳が築造されている。芝本遺跡が位置する赤佐地区には後期古墳が数多く築造されている。古代には亀玉郡に属し、篠場瓦窯跡などの生産遺跡が造営されている。中世には、中屋遺跡に寺院が建立され、宗教的な中心地であったとみられる。



Fig.2 弥生時代における芝本遺跡と周辺の遺跡

3 芝本遺跡の調査履歴

芝本遺跡では、2016年6月までに22回の発掘調査が行われている。芝本遺跡はかつて遺物の散布状況などから、A～H地点の8地点にわけて認識されてきた。芝本遺跡の内容が明らかにされたのは、1962（昭和37）年頃に21次調査地の南側を東西に貫通する道路の拡幅工事の際に弥生土器が豊富に出土したことによる。その後、発掘調査が断続的に実施され、竪穴住居14棟、方形周溝墓2基、土器棺3基、溝1条、土器集積土坑1基が確認されている。以下、主要な調査成果について、墓域と居住域に分けて紹介する。地点毎に異なる遺跡として認識されていた部分があり、芝本遺跡として包括して調査回数を数え上げる際に混乱が生じていたが、本文中に用いる調査回数は、Tab.1に整理したものとする。

方形周溝墓の調査 方形周溝墓は、1963・1964年（昭和38・39）に浜名高等学校史学クラブ（以降、浜名高校とする）が実施した1・2次調査において検出されている。調査地点は、21次調査と同じ敷地内である。1次調査では9本の調査溝を敷地内に配置し、溝の検出や豊富な出土遺物を得るとともに、方形周溝墓が展開している可能性が示された。2次調査では、1次調査区を拡張し、1号方形周溝墓（SZ01）と2号方形周溝墓（SZ02）の2基の方形周溝墓が展開していることが明らかになった。1・2次発掘調査当時、方形周溝墓の検出例は全国的に限られており、学史上でも大きな調査成果であったといえる。

集落の調査 芝本遺跡における住居跡は、1～5・10次調査区から計14棟が検出されている。いずれの住居跡も弥生時代のものと捉えられる。SZ02の中央付近の下層において検出されたSB01を除き、いずれの住居跡も方形周溝墓や土器棺墓が造営された区域と異なる場所に立地している点が注目できる。

Tab.1 芝本遺跡の調査履歴

回数	調査期間	調査主体	主な時代	特記事項	備考	文献
1次	1963.5	浜名高校	弥生	方形周溝墓2基を確認	第1次調査	浜名高校1963・1968、静埋研2007
2次	1964.7-8	浜名高校	弥生	方形周溝墓2基の全体像把握	第2次調査	浜名高校1968、静埋研2007
3次	1965.7	浜名高校	弥生	住居跡を検出	岩水寺弥生遺跡	浜名高校1988、浜北市教委1985
4次	1966.7	浜名高校	弥生	溝状遺構と住居跡を検出	第3次調査	浜名高校1968、静埋研2007
5次	1967.7	浜名高校	弥生	住居跡と土器廃棄遺構を検出	第4次調査	浜名高校1968、静埋研2007
6次	1967.8	浜名高校	弥生・中世	遺跡希薄地点	北部中西弥生遺跡	浜名高校1968
7次	1968.7	浜名高校	弥生	住居跡を確認	第5次調査	浜名高校1968、静埋研2007
8次	1974.7	浜名高校	弥生・近世	壺形棺と祭祀用土器集中箇所の確認	第6次調査	浜名高校1979、静埋研2007
9次	1997.6	浜北市教委	弥生・中世	中世の遺物が出土		浜北市教委1998
10次	2000.9-10	浜北市教委	弥生	住居跡を検出		浜北市教委2001
11次	2010.3	浜松市教委		遺跡範囲外		浜松市教委2011
12次	2011.6	浜松市教委	弥生	遺構・遺物を検出		浜松市教委2013
13次	2011.10	浜松市教委		遺跡範囲外		浜松市教委2013
14次	2012.8	浜松市教委		遺跡範囲外		浜松市教委2014
15次	2013.1	浜松市教委		遺跡範囲外		浜松市教委2014
16次	2015.1	浜松市教委		遺跡希薄地点		浜松市教委2015
17次	2015.2	浜松市教委		遺跡希薄地点		浜松市教委2015
18次	2015.6	浜松市教委		遺跡範囲外		浜松市教委2016
19次	2015.7	浜松市教委		遺跡範囲外		浜松市教委2016
20次	2015.9	浜松市教委		遺跡希薄地点		浜松市教委2016
21次	2015.10-11	浜松市教委	弥生	方形周溝墓の再調査		浜松市教委2016
22次	2015.12	浜松市教委	弥生・中世	弥生土器と中世遺物の確認		浜松市教委2016

文献

浜名高等学校史学クラブ1963『伎倍』1
 浜名高等学校史学クラブ1968『伎倍』2
 浜名高等学校史学クラブ1979『伎倍』6
 浜北市教育委員会1998『浜北市芝本遺跡B地点』
 浜北市教育委員会2001『平成9年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書』
 浜北市教育委員会2001『平成12年度浜北市埋蔵文化財発掘調査報告書』

浜松市教育委員会2011『平成21年度 浜松市試掘調査概要』
 浜松市教育委員会2013『平成23年度 浜松市文化財調査報告』
 浜松市教育委員会2014『平成24年度 浜松市文化財調査報告』
 浜松市教育委員会2015『平成25年度 文化財調査報告』
 浜松市教育委員会2016『平成26年度 文化財調査報告』
 静岡県埋蔵文化財調査研究所2007「芝本遺跡H地点 第1～6次調査報告」『東京遺跡』

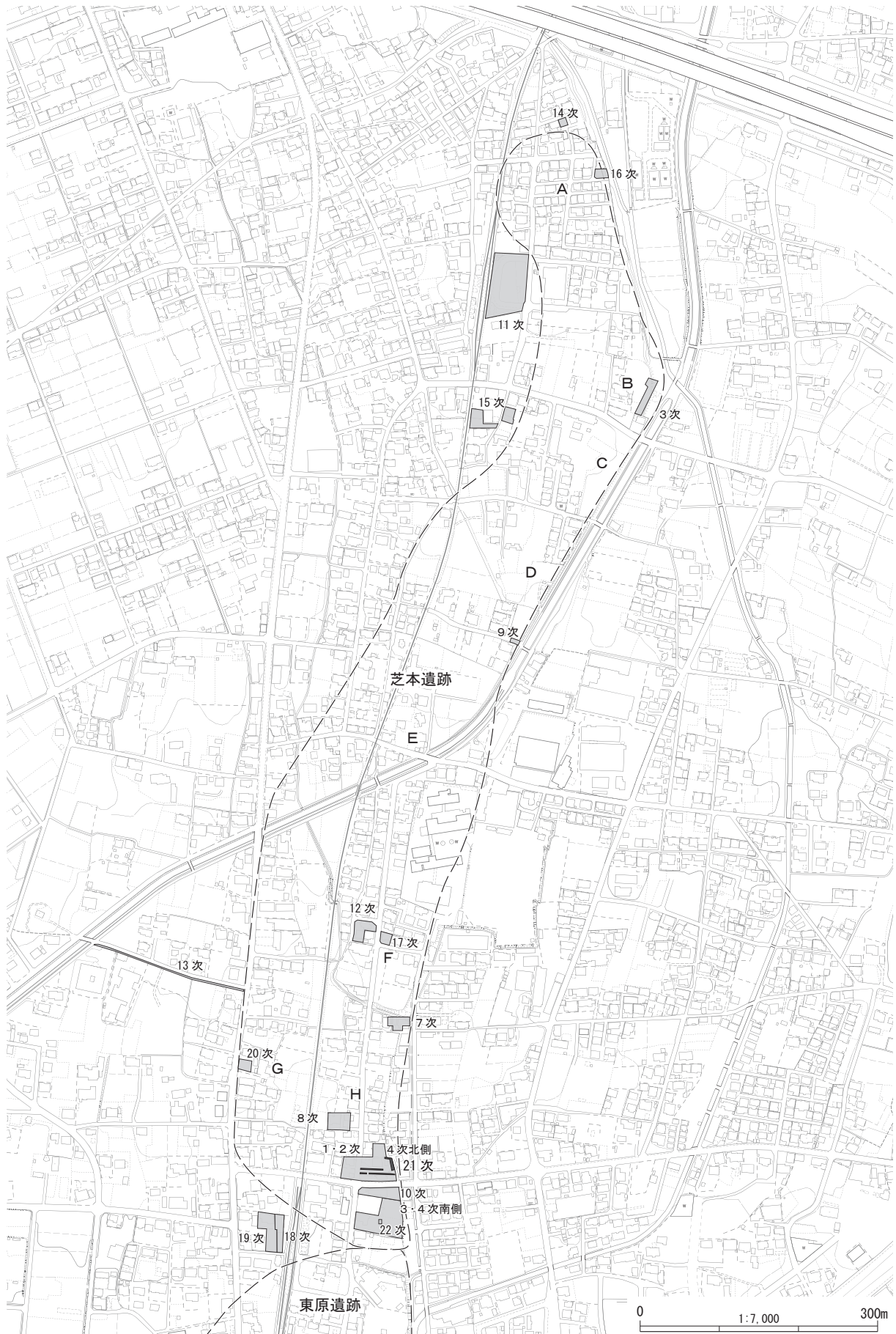


Fig.3 芝本遺跡の調査地点

第2章 調査成果

1 調査成果の概要

(1) 基本層位

芝本遺跡 21 次調査区において確認できた基本層位は、上位層から、表土（暗褐色土）、耕作土（褐色系の粘質土）、遺物包含層（暗褐色や黒褐色の粘質土）、基盤層（上位：褐灰色粘質土、下位：黄褐色粘質土・砂礫土）である。遺構埋土は暗褐色粘質土や黒褐色粘質土である。遺構が掘り込まれた面は、弥生時代の旧表土と捉えられる褐灰色粘質土の上面である。しかし、遺構埋土と検出面の色調及び土質が類似しているため、色調や土質の違いが顕著な黄褐色粘質土や黄褐色砂礫土の上面を遺構検出面として調査を行った。

(2) 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は、方形周溝墓 2 基と溝 1 条と土坑 5 基、小穴 48 基である。方形周溝墓をはじめとした遺構の多くは、弥生時代後期のものと捉えられるが、調査溝 3 の SP03 のように、鎌倉時代の小穴もみられる。方形周溝墓の遺構番号は、浜名高校が実施した 1・2 次発掘調査成果の表記に準拠し、調査対象地南部（調査溝 1）において検出した方形周溝墓を 1 号方形周溝墓（SZ01）、調査対象地北東側（調査溝 3・4）で検出したものを 2 号方形周溝墓（SZ02）とする。また、調査溝 1 の東端において遺物が集中して出土した溝（SD08）がある。SD08 は、検出面積が狭く、攪乱も顕著なため詳細は不明である。

出土遺物の多くは、方形周溝墓の埋土から出土した弥生土器である。SZ01 東側周溝埋土から出土した鉄製品と、SZ02 東側周溝埋土から豊富に出土した弥生土器が注目できる。

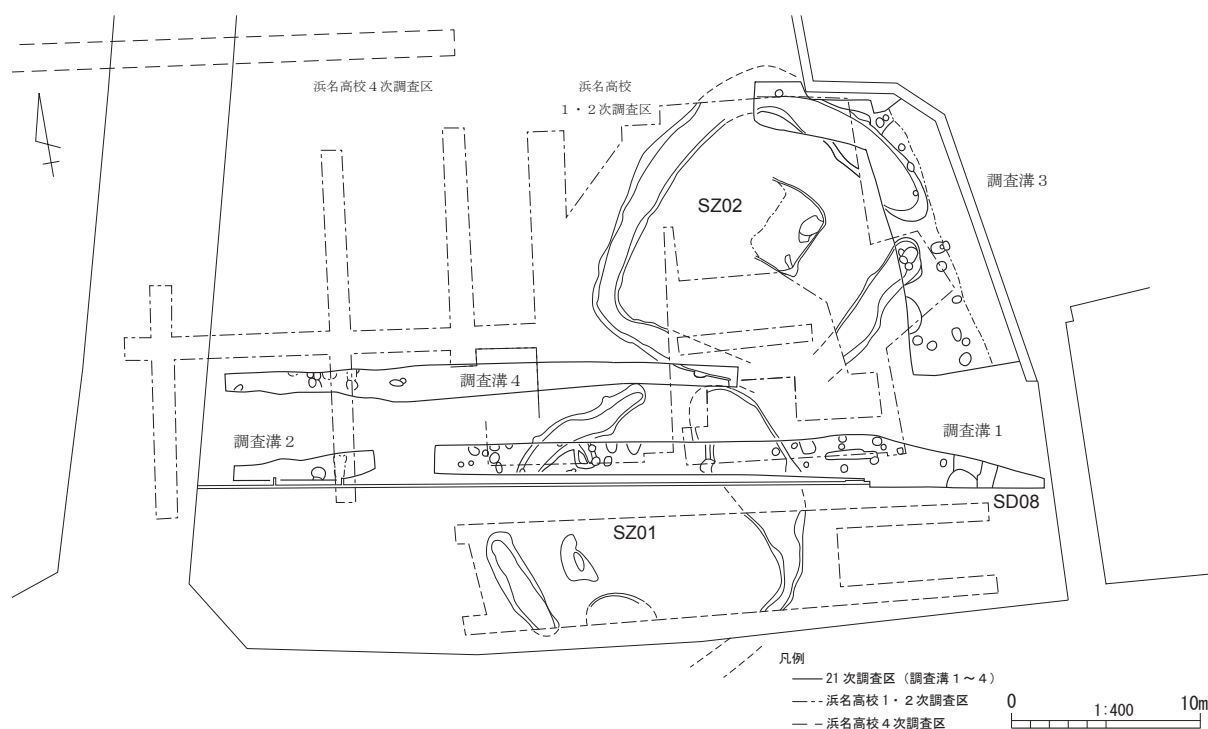


Fig.4 芝本遺跡 21 次調査区配置

2 1号方形周溝墓

(1) 検出状況

1号方形周溝墓(SZ01)は、調査溝1において検出したSD03とSD07により周溝の一部が構成された方形周溝墓である。周溝は、旧表土と捉えられる褐灰色粘質土(12層)から掘り込まれ、埋土は、褐色～黒褐色粘質土(6～9・11層)である。とくに6～8層の暗褐色や黒褐色の粘質土には有機物にまじり豊富な遺物が含まれていた。平面形はほぼ方形を呈し、周溝の内側で計測すると全長約11～13m、周溝の外周で計測すると全長約15.5mである。墳丘の有無は不明であるが、周溝底と墳丘で最も高い部分の比高差は0.8mある。

SD03 SD03は、1・2次調査で検出された3号遺構にあたり、SD03の北側半分はすでに発掘調査されていた。いっぽう、南半分は未調査部分であったため、方形周溝墓の構造や埋没状況をうかがい知る上で重要な成果が得られた。SD03は、最大で深さ0.8m、幅4.5mである。埋土中からは、遺物が豊富に出土した。

SD07 SD07は、大部分が浜名高校により実施された2次調査で検出された7号遺構と同一の遺構である。過去の発掘調査により大部分が調査された遺構のため、今回の発掘調査により得られた情報は限られている。SD07の規模は、幅が1.5m、検出面からの深さが0.5mである。SD07は、調査区南側ほど幅が狭くなり、浅くなっていることから、さらに南側で収束する可能性が高い。また、周溝の内側(埋葬施設側)と外側の比高差は認められない。SZ01は、明確な墳丘を伴わない形態の方形周溝墓であった可能性がある。

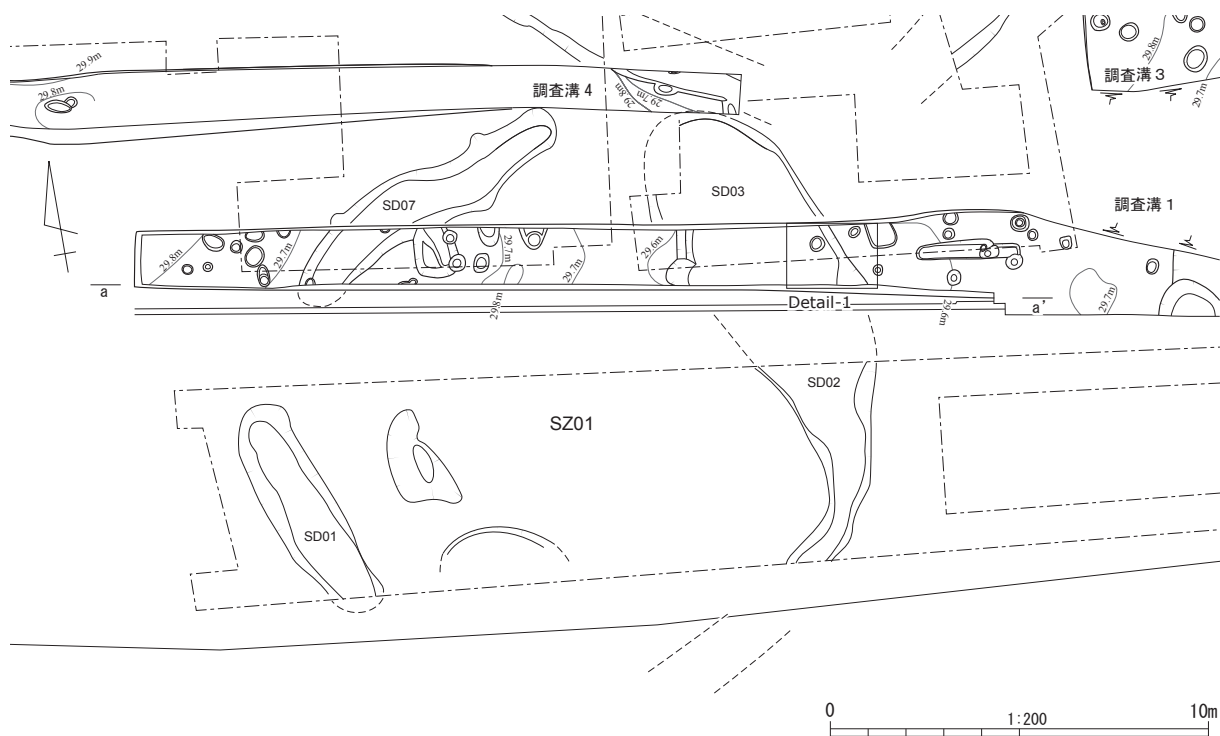
(2) 遺物の出土状況

SZ01を構成するSD03の南半からは豊富な弥生土器が出土した。出土遺物はSD03の埋土とその周辺を中心に出土した。弥生土器は周溝埋土のうち6～8層から出土した。また、8層中と9層の境界部分から鉄製品(11)が1点出土した。

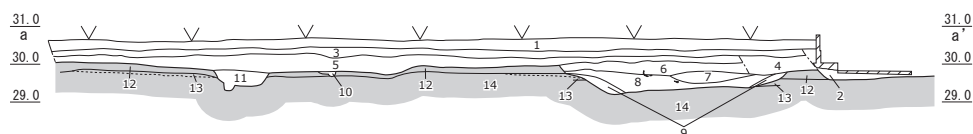
(3) 出土遺物 (Fig.6)

SD03の埋土から出土した出土遺物のうち器種や時期的な特徴を示す遺物を抽出し、弥生土器10点と鉄製品1点を図示した。

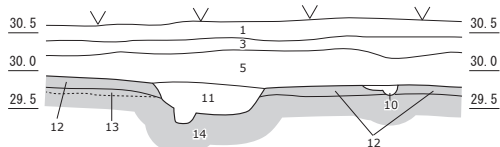
弥生土器 (1～10) 1は直立口縁壺である。口径13.5cmで頸部等に模様はみられない。2は折返口縁壺で口径18.8cm、内外面ともにハケメがみられる。3は壺の肩部から頸部である、頸部内面には原体の端部に結節をもつ無節縄文を用いた装飾がみられ、4個一組の浮文が3方に施されたと推定できる。外面は、頸部の付け根部分に突帯を廻らせており、肩部外面には結束した無節斜縄文を用いた装飾がみられる。また、縄文の結束部分には3個一組の浮文が3方もしくは4方に施されたとみられる。4は大型の壺で、肩部には羽状刺突を施す。胴部高は54cm、胴部最大径は48cmに復元できる。5は直口壺で、頸部付け根部分に刺突がみられる。6は装飾小型直口鉢で、口径15.9cmに復元できる。7～9は高杯の脚部である。7は、3方に円形の透孔を持ち、底径は11.5cm、脚長は10cmあり、脚部はほぼ直立する。8は、円形透孔が一箇所確認できるが配置は不明である。9は、透孔を持たない。10はく字甕で、口径18.4cm、体部高20cm、胴部最大径20.8cmある。口縁端部に刺突をもつものである。体部外面にはススが付着し、内面にはコゲの付着が認められる。



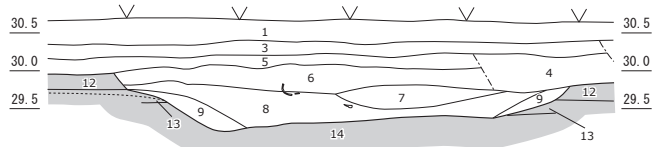
調査溝 1 土層断面図



西側周溝断面図



東側周溝断面図



調査溝 1 南側土層断面図

- | | | |
|---------------------|-------------------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 6 黒褐色粘質土 (SD03 埋土、遺物含む) | 11 黒褐色粘質土 (SD07 埋土) |
| 2 暗褐色土 (しまり悪い、攪乱) | 7 黒色有機質土 (SD03 埋土、遺物含む) | 12 褐灰色粘質土 (基盤層) |
| 3 褐色粘質土 | 8 暗褐色粘質土 (SD03 埋土、遺物含む) | 13 明黄橙色粘土 (基盤層) |
| 4 暗褐色と黒褐色土の濁色層 (攪乱) | 9 褐色粘質土 (SD03 初期流入土) | 14 黄色砂礫土 (基盤層) |
| 5 暗褐色粘質土 | 10 黒褐色粘質土 (SD 埋土) | |

Detail-1

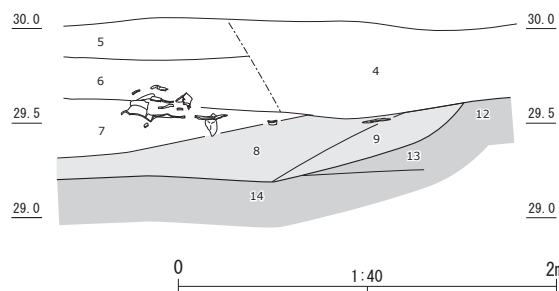
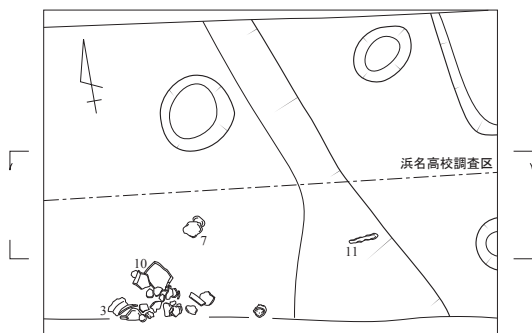


Fig.5 SZ01 検出状況

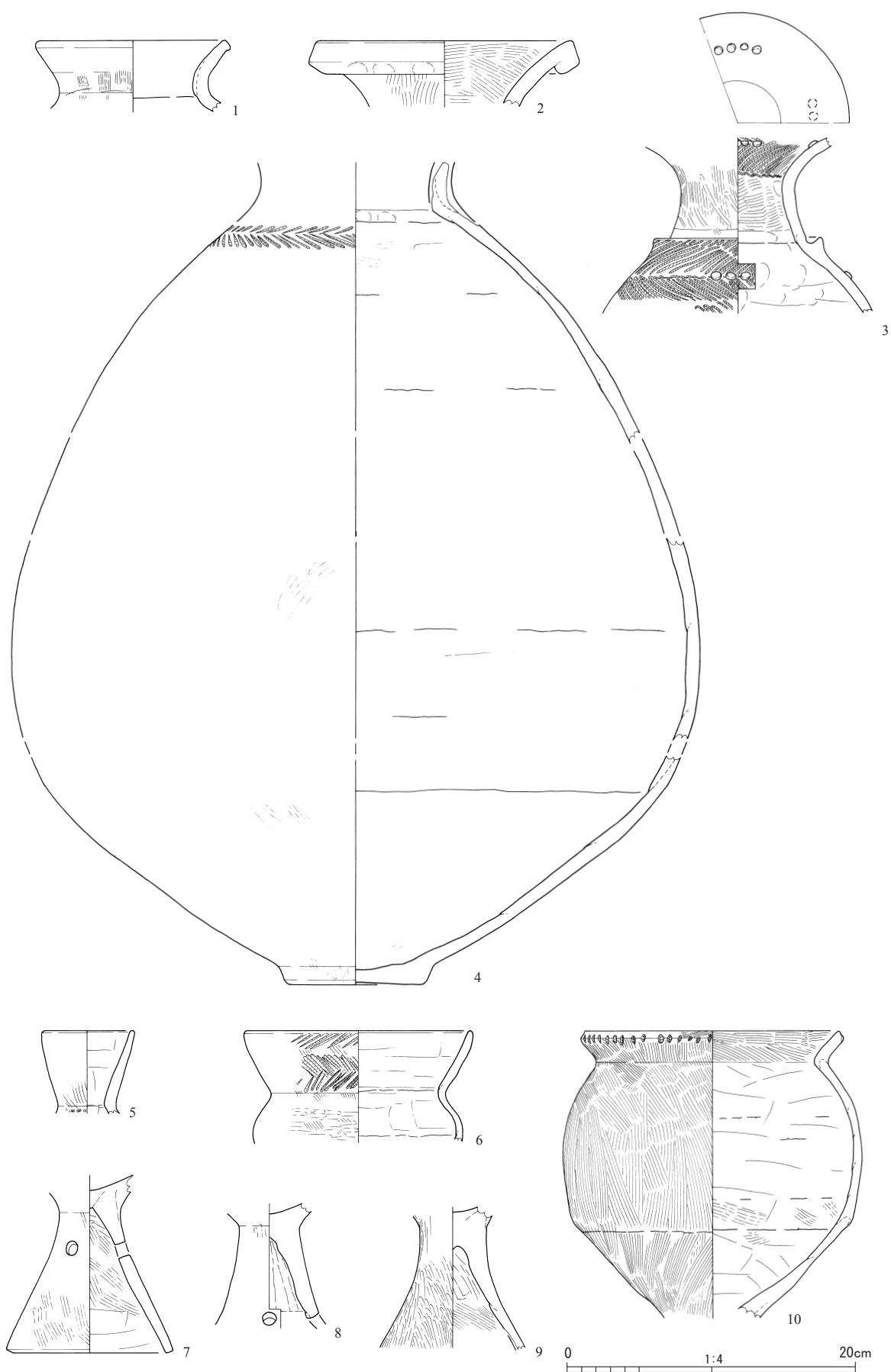


Fig.6 SZ01 出土遺物実測図

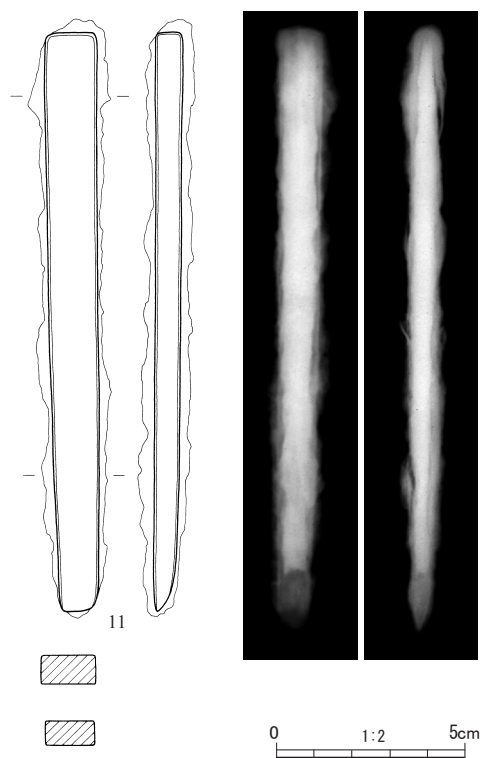


Fig.7 SZ01 出土鉄製品実測図

鉄製品 (11) 鉄製品 (11) は全長 15.4cm、幅 1.9cm、厚さ最大 0.7cm、重さ 84g である。鑿もしくは鉄素材とみられる。弥生土器に混ざって SD03 の外縁部の初期流入土 (Fig.6-9 層) 上面から出土した。浜名高校が実施した 1・2 次調査区と近接していることや、上部に攪乱が迫っていることから、発掘調査や攪乱に伴い混入した可能性も排除できない。類例の増加を待つて再検討を加える必要がある。

(4) 小 結

SZ01 は、1・2 次調査によって部分的な発掘調査が行われており、21 次調査区の多くが過去の調査区と重複した部分であった。過去の調査位置の詳細な記録作成を行い、過去の調査成果を検討する情報を得た。また、新規調査部分から得られた情報も少なくない。これらの調査成果をもとに SZ01 の規模や時期についてまとめる。方形周溝墓の規模は、墳丘裾部で計測すると全長 11 ～ 13m である。周溝の幅は最大約

6m であり、検出面から周溝底までの深さは 0.8 m である。周溝の隅角部のうち 2 ～ 3 方の角に陸橋部が設けられたと捉えられる。埋葬施設は、方形周溝墓の中心部にあったと想定され、1・2 次調査によって探求がなされたが明らかになっていない。しかし、墳丘中央部に構築された集石遺構内から凝灰岩製の管玉が出土しており、埋葬施設が近傍に所在した可能性がある。

SZ01 の築造時期は、1・2・21 次調査の出土遺物から、山中Ⅲ式期から欠山Ⅰ式期への移行期と捉えられる。いっぽうで、1・2 次調査によって SZ01 から出土した遺物の中には欠山Ⅱ式に降る可能性があるものも含まれている。

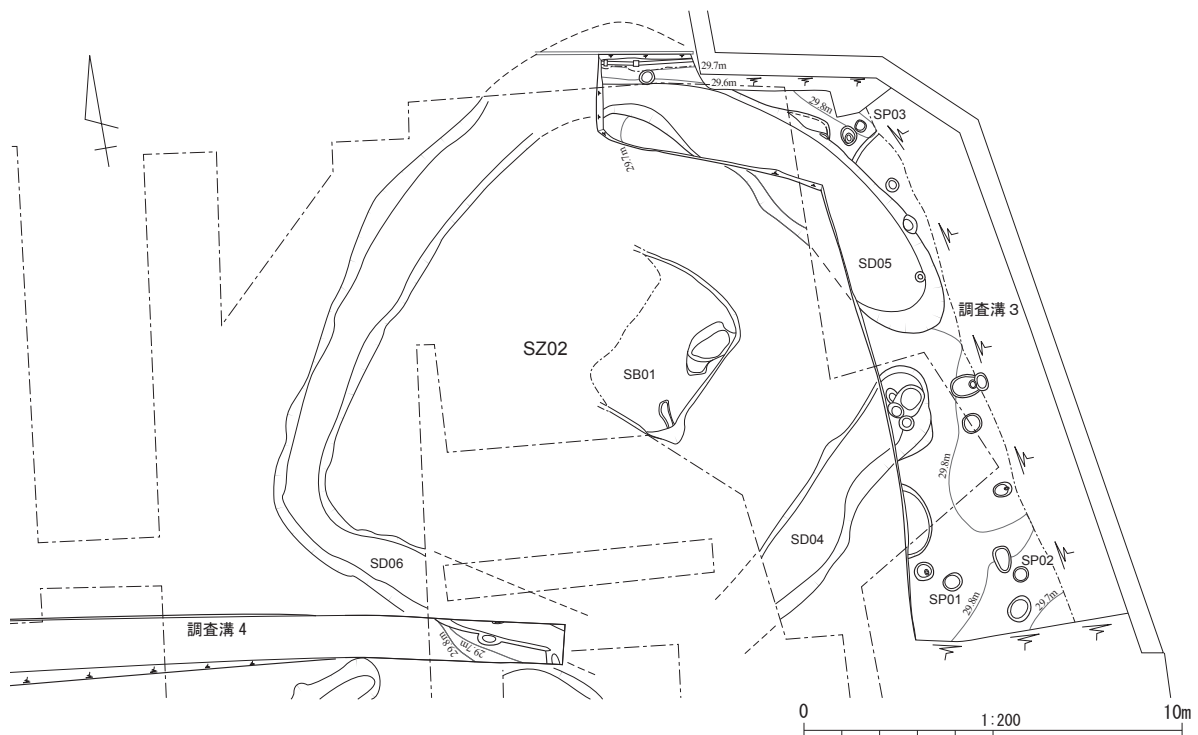
3 2号方形周溝墓

(1) 検出状況

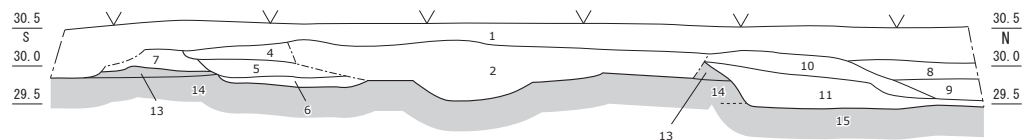
2号方形周溝墓 (SZ02) は、調査溝 3 の中央部で検出した SD04 と北半で検出できた SD05、調査溝 4 の東端において検出した SD06 が周溝の一部を構成する方形周溝墓である。周溝は、旧表土と捉えられる褐灰色粘質土 (Fig.8-13 層) から掘り込まれ、埋土は、褐色や黒色の粘質土 (10 ～ 12 層) である。とくに 10 層の黒色粘質土からは豊富な弥生土器が出土した。平面形はほぼ方形を呈し、周溝の内側で計測すると全長約 13 m、周溝の外周で計測すると全長約 15.5 m である。

SD04 SD04 は、1・2 次調査で検出された 4 号遺構と同じ遺構である。検出面からの深さは 0.4m ほどで、幅は 2.5 m 程度である。SD04 と SD05 の間には検出面で 1 m ほどの幅で途切れており、SZ02 の東側隅角部には陸橋部があったことが明らかになった。

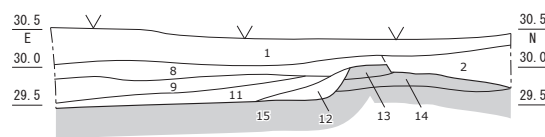
SD05 SD05 は、1・2 次調査で検出された 5 号遺構と同じの遺構である。北側半分において過去に発掘調査が実施されているが、南半分は未調査部分であったため、方形周溝墓の構造や埋没状況をうかがい知る上で重要な成果が得られた。SD05 は、最大で深さ 0.8m、幅約 3 m である。



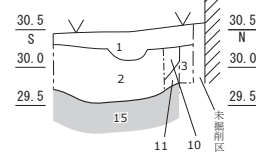
調査溝3 西壁 (a) 断面



調査溝3 南壁 (b) 断面



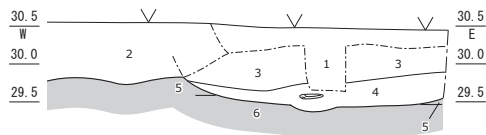
調査溝3 北西壁 (c) 断面



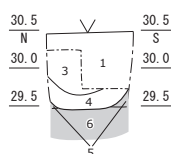
調査溝3 土層注記

- | | | |
|------------------------|----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 (しまり悪い、表土、攪乱) | 7 黒褐色粘質土 (遺物包含層) | 12 黒褐色粘質土 (SD埋土、初期流入土) |
| 2 暗褐色土 (しまり悪い、1・2次調査区) | 8 暗灰褐色粘質土 (SD埋土) | 13 褐灰色粘質土 (基盤層) |
| 3 黒褐色土 (管理施設時掘方) | 9 灰褐色粘質土と暗褐色有機質土の互層 (SD埋土) | 14 浅黄橙色粘土 (基盤層) |
| 4 暗褐色粘質土 (しまり良い、遺構埋土) | 10 黒色粘質土 (SD埋土、遺物多量に含む) | 15 黄色砂礫土 (基盤層) |
| 5 黒色粘質土 (遺物含む、遺構埋土) | 11 褐色粘質土 (SD埋土、初期流入土) | |
| 6 灰褐色粘質土 (遺物含む、遺構埋土) | | |

調査溝4 北壁 (d) 断面



調査溝4 南壁 (e) 断面



調査溝4 土層注記

- | |
|----------------------|
| 1 暗褐色土 (表土、攪乱) |
| 2 暗褐色粘質土 (1・2次調査区) |
| 3 黒褐色粘質土 (SD埋土、遺物含む) |
| 4 暗褐色土 (SD埋土、遺物含む) |
| 5 にぶい橙色粘土 (基盤層) |
| 6 浅黄色砂礫土 (基盤層) |

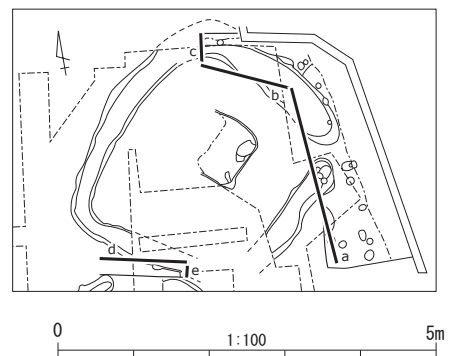
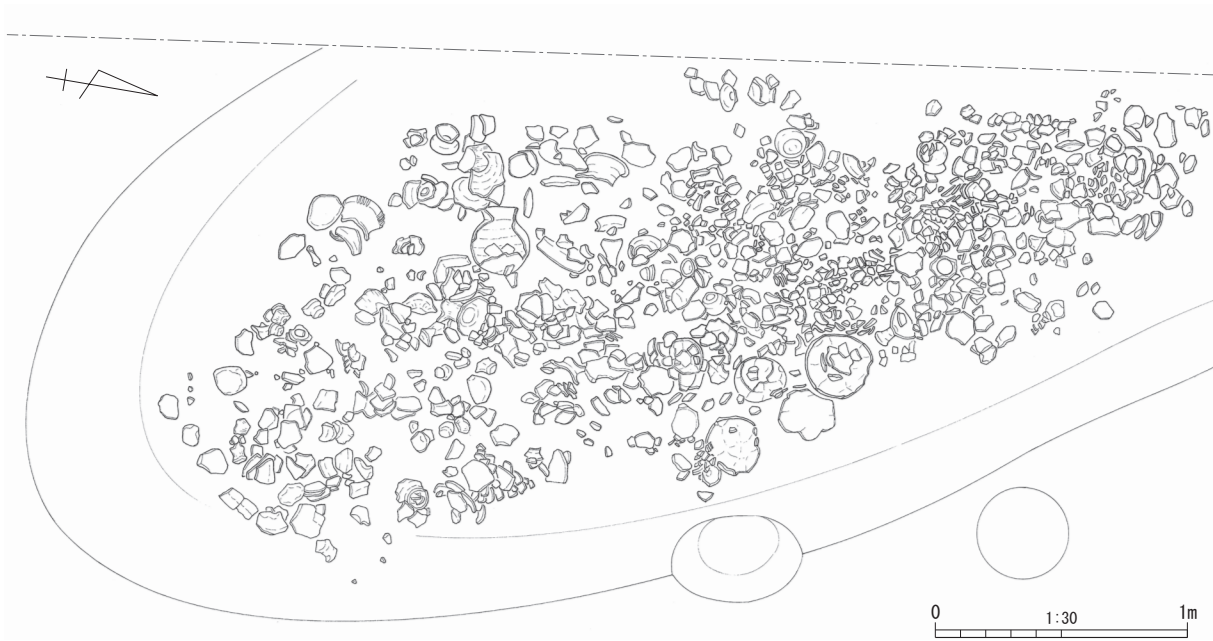


Fig.8 SZ02 詳細図

SZ02 出土状態図



SZ02 出土状態図 (出土遺物 No. 有)

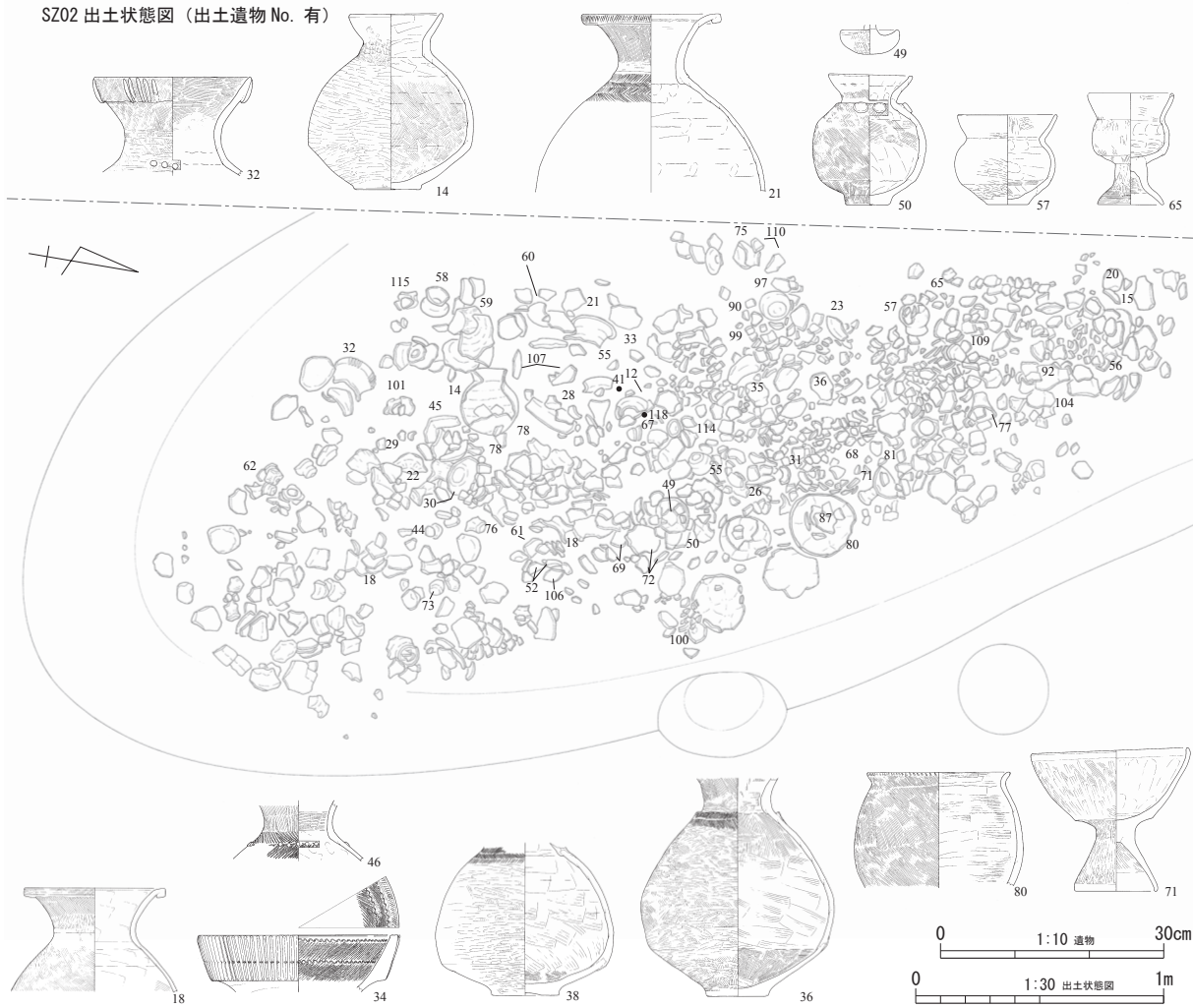


Fig.9 SD05 遺物出土状態図

SD06 SD06 は、調査溝 4 の東端で検出した溝で、1・2 次調査により検出された 6 号遺構の延長部分にあたる。周溝底のみの検出であり規模や深さは明確ではないが、他地点で検出された周溝に比べ底部の幅が 1m と狭小であり、周溝が収束する可能性がある。

(2) 遺物の出土状況

SZ02 から出土した遺物の多くは SD05 の 10 層から出土したもので、出土状態を Fig.9 に示した。遺物の多くは、周溝が 10cm 程度埋没した段階で周溝内に埋もれた状況であった。周溝埋土上層から豊富に出土した遺物には完形のものがみられず、ススやコゲなどの使用痕跡を認められるものが多くある。また、遺物の出土状況に規則性は認められず、周溝がある程度埋没した段階で廃棄された土器群と捉えられる。なお、初期流入土から出土した遺物は少数であるが、43 や 44 がみられ、方形周溝墓の築造時期を示す遺物として注目できる。

(3) 出土遺物 (Fig.10 ～ 16)

外反口縁壺 (12) 外反口縁壺は、口縁部が外反する壺である。12 は、口径が 13.7cm であり、口縁部内面に無節縄文が認められる。

直立口縁壺 (13・14) 直立口縁壺は、口縁部が直立し口縁端部を丸く納めるもので、13・14 がある。13 は口径 14.2cm あり、頸部付け根部分の外面には無節縄文がみられる。14 は全形がうかがえるものであり、口径 12.7cm、器高 23.4cm、胴部最大径 22.1cm である。

内湾口縁壺 (15・16) 内湾口縁壺は、口縁部が内湾し、口縁端部を丸く納めるか面を持つもので、15・16 がある。15 は口径 16.6cm あり、口縁部内面には結節をもつ複節斜縄文がみられる。口縁端部には水平な面を持ち、複節斜縄文が認められる。16 は口径が 13.7cm ある。

拡張口縁壺 (17) 拡張口縁壺は口縁端部に地面と垂直な面をもつものである。出土した拡張口縁壺は 17 の 1 点のみで口径は 28.0cm に復元できる。

折返口縁壺 (18 ～ 31) 口頸部が外反し、口縁端部を外側下方に折り返し肥厚させるもので 18 ～ 31 がある。無文のもの (18・19) と、有文のもの (20 ～ 31) がある。20・21 は口縁端部外面に刺突が施される。21 の肩部には羽状の刺突が施されている。22 ～ 25 は口縁端部の内外面に刺突を交差させた格子状の文様をもつものである。25 は口縁端部外面に格子状の刺突をもち、口縁端部内面には櫛描波状文、肩部には有段の羽状文がみられる。26 は口縁端部外面に刺突文、口縁端部内面に櫛描波状文をもつものである。

27 ～ 31 は、施文に縄文を用いるものである。27 は、口縁端部外面に無節縄文を用い内面には原体の末端にある結節部を用いたとみられる波状文風の施文がみられ、その上部には無節縄文がかすかに残存している。28・29 は、全形がうかがえる資料である。28 は口径 20.2cm、胴部最大径 27.4cm、底径 7.6cm、器高 32.4cm である。口縁端部外面には列線文、肩部から頸部付け根にかけて有段の羽状刺突が 3 段みられる。口縁端部の平坦面と口縁部内面には無節縄文がみられる。29 は、口径 17.2cm、器高 25.8cm、胴部最大径 21.7cm、底径 9.0cm である。外面は肩部には、原体の末端が結節された、反撚の原体をもちいた無節の縄文が 2 段に渡りみられる。また、1 段目と 2 段目の縄文の間には 2 個一組の浮文がみられる。口縁部内面にも、反撚の原体をもちいた無節の縄文がみられる。30 は、口縁部外面に列線文をもち、肩部には有段の羽状刺突が 2 段以上みられる。口縁端部の平坦面から口縁部内面にかけて、末端部に結節がある単節斜縄文が 3 段にわたりみられる。31 は、口縁部外面と肩部に刺突がみられ、口縁部内面には単節斜縄文がみられる。

複合口縁壺 (32～34) 複合口縁壺は、口縁部外面に地面と垂直もしくは垂直に近い角度の幅の広い平坦面をもつもので、32～34を図示した。32は、口縁部外面の3方に帯状の粘土を5条一組で配置し、肩部には3個一組の円形の浮文を配置している。33は、口縁部外面に2段の無節縄文をもち、口縁端部の平坦面には刺突がみられる。34は、肥厚させた口縁部外面に幅1cm程度の凹凸を全周するように配置し、凸部の中央に刺突を行い上下に分けている。また、口縁端部の平坦面には複節斜縄文を施し、口縁部内面には、2段以上の結節をもった複節斜縄文が認められる。34は大型であり、口径は27.0cmである。

壺の体部 (35～48) 壺の体部を35～48に示した。35は、体部上半に刺突や櫛描きの文様がみられ、頸部付け根には4個一組の浮文をもつ。体部下1/3付近では、明瞭な稜がみられる。36～41は肩部から頸部に欠けて刺突を1～3段にわたり施したものである。40・41は頸部付け根部分に円形浮文がみられる。42は肩部から頸部付け根にかけて、櫛描波状文、櫛描横線文、羽状刺突1段と2個一組の浮文がみられる。43は2条の櫛描横線文の間に櫛描波状文がみられる。44は、頸部付け根部分と櫛描横線文の間に列点文がみられる。43・44は周溝埋土の最下層から出土したものである。45～47は縄文をもつものである。45は、原体の端部に結節をもつ無節縄文がみられる。46は結節をもつ複節斜縄文である。5個一組の円形浮文を4方に配置する。47は、肩部に結節をもつ単節斜縄文がみられる。48は無文である。

小型壺 (49～55) 49に小型壺の蓋、50～55に小型壺を示した。49は壺の蓋で、最大径は7.8cmである。50は、小型の内湾口縁壺で、口径11.2cm、最大径15.2cm、底径6.2cm、器高17.4cmである。肩部には直径2cmほどの円形浮文を2個一組で2方に配置している。49は出土時に50の中から出土しており、一組であったと捉えられる。51は折返口縁壺の小型品で、口径8.0cm、最大径8.6cm、底径4.2cm、器高9.9cmである。52～54は、頸部から口縁部にかけての形態が定かではないが、頸部の立ち上がり具合や括れ具合から小型の壺とした。55は頸部に4段の刺突がある。最大径は11.0cm、底径5.2cmである。

小型直口鉢 (56～64) 56～64は小型の直口鉢である。全形がわかるものを中心に図化した。口径は9.0cm～13.3cm、器高は7.8cm～12.0cmのものが主体である。56は口頸部付け根に刺突がある。本調査により出土した小型直口鉢のなかで施文が認められた個体は56のみである。63は、焼成後の穿孔がみられる。

脚付小型直口鉢 (65) 65は小型直口鉢に脚台が伴うものである。口縁端部が欠損しているが、口径11.2cm、器高15.0cmと推定でき、最大径は10.2cm、脚径は8.8cmである。

片口鉢 (66・67) 片口鉢は66・67の2点を図化した。66は全形をうかがい知ることが可能な資料で、口径17.6cm、底径7.7cm、器高7.4cmである。67は片口の部分が欠損しており高坏の可能性もあるが、器形から片口鉢として掲載する。

高 坏 (68～77) 68～77は高坏である。68は山中式の高坏で口径は24.6cmある。外面にススが付着し、内面にはコゲが認められる。69はく字形碗坏部高坏で口径20.2cmである。70は山中式の高坏の脚部である。脚部には横線文があり円形透孔が確認できる。71は全形がうかがえる有稜高坏である。口径21.5cm、器高19.2cm、坏部高9.4cm、脚部高9.5cm、脚径11.2cmである。欠山Ⅱ式期と捉えられる。72は有稜高坏で、脚部には円形透孔がみられる。73～77は高坏の脚部である。いずれも内湾しており、欠山式期の特徴を有しているといえる。

く字甕 (78～120) 78～93にく字甕を示した。全形をうかがい知ることが出来るものは93のみである。いずれの個体もススやコゲといった使用の痕跡や欠損が認められる。口縁部には刺突が

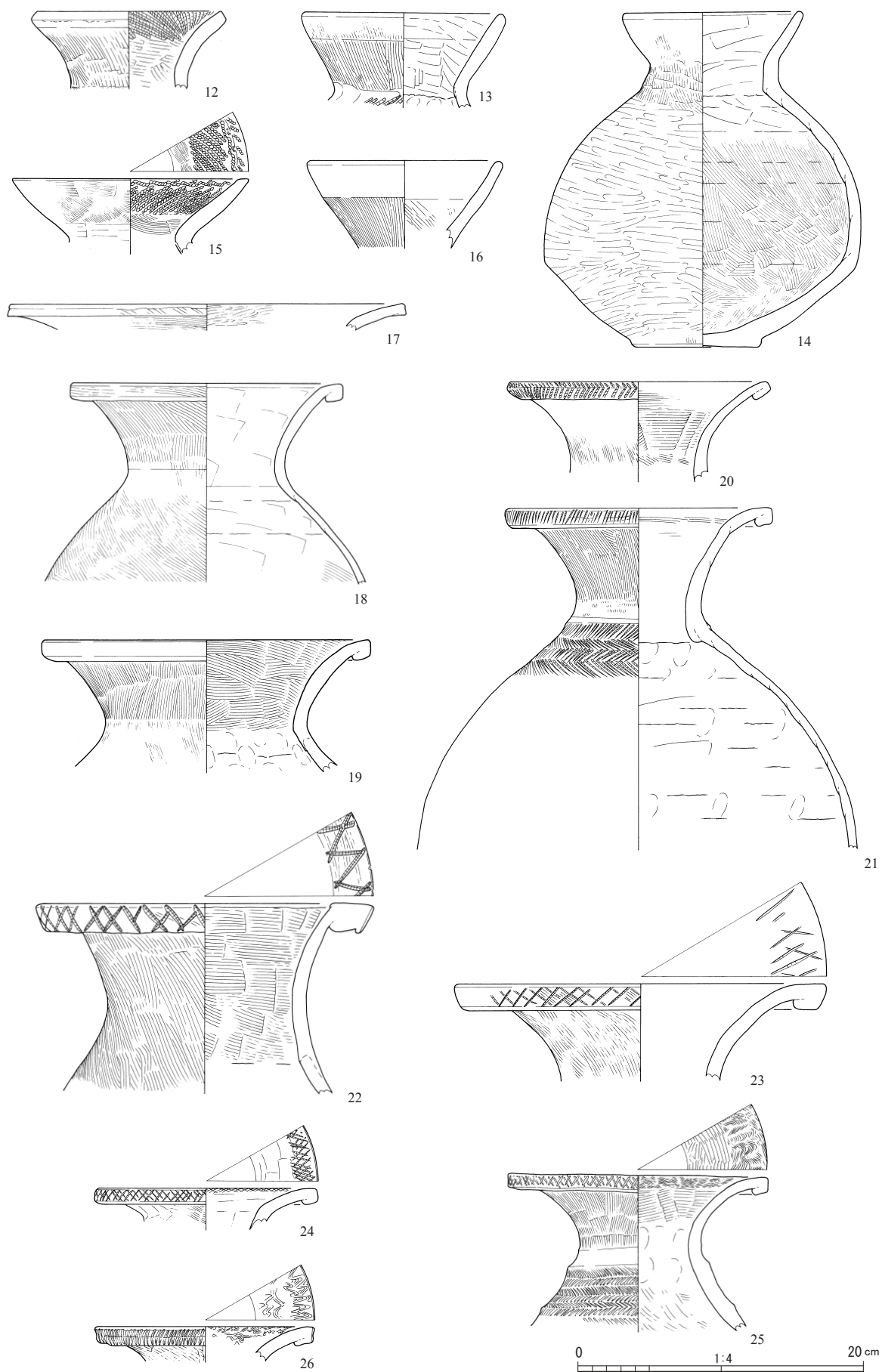


Fig.10 SZ02 出土遺物実測図 (1)

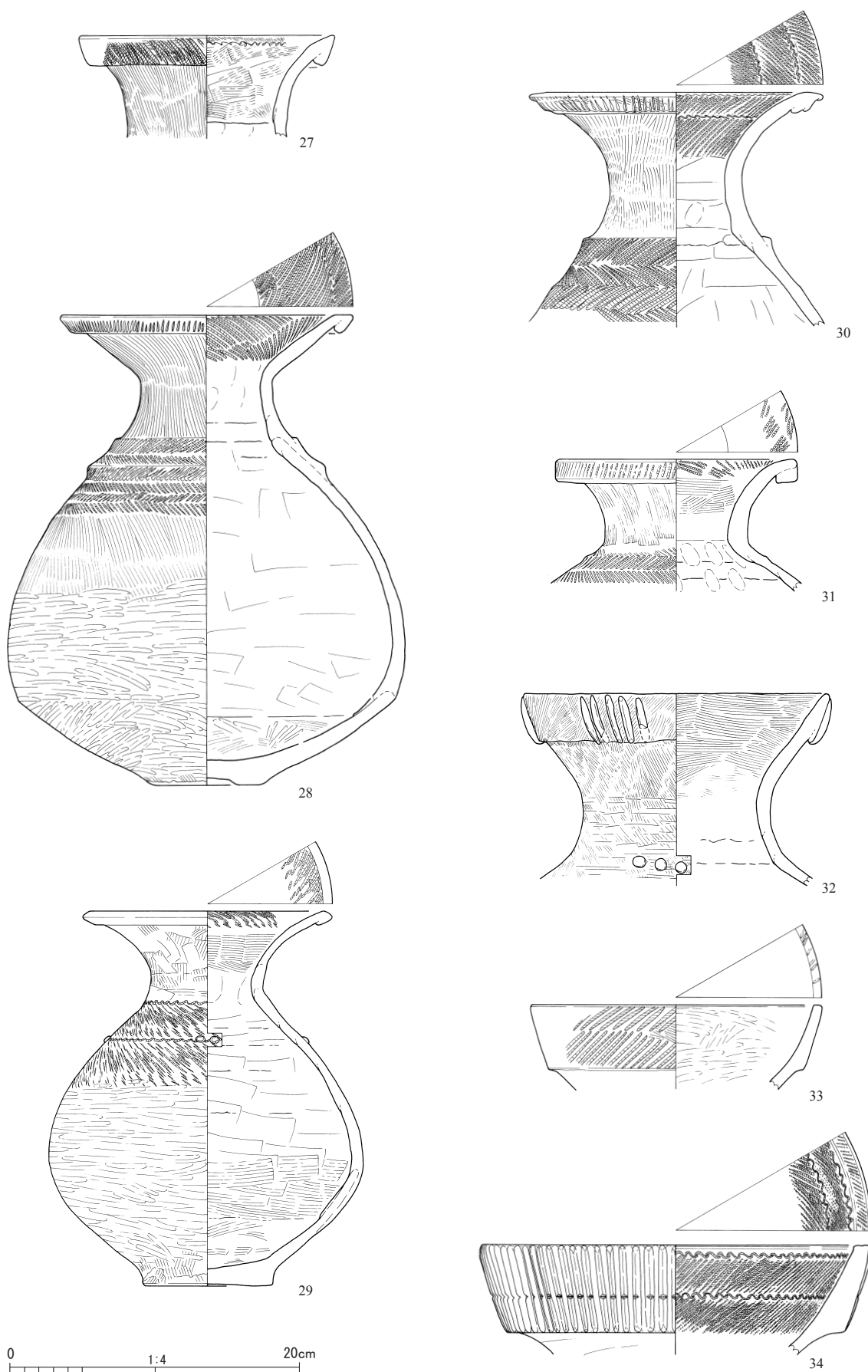


Fig.11 SZ02 出土遺物実測図 (2)

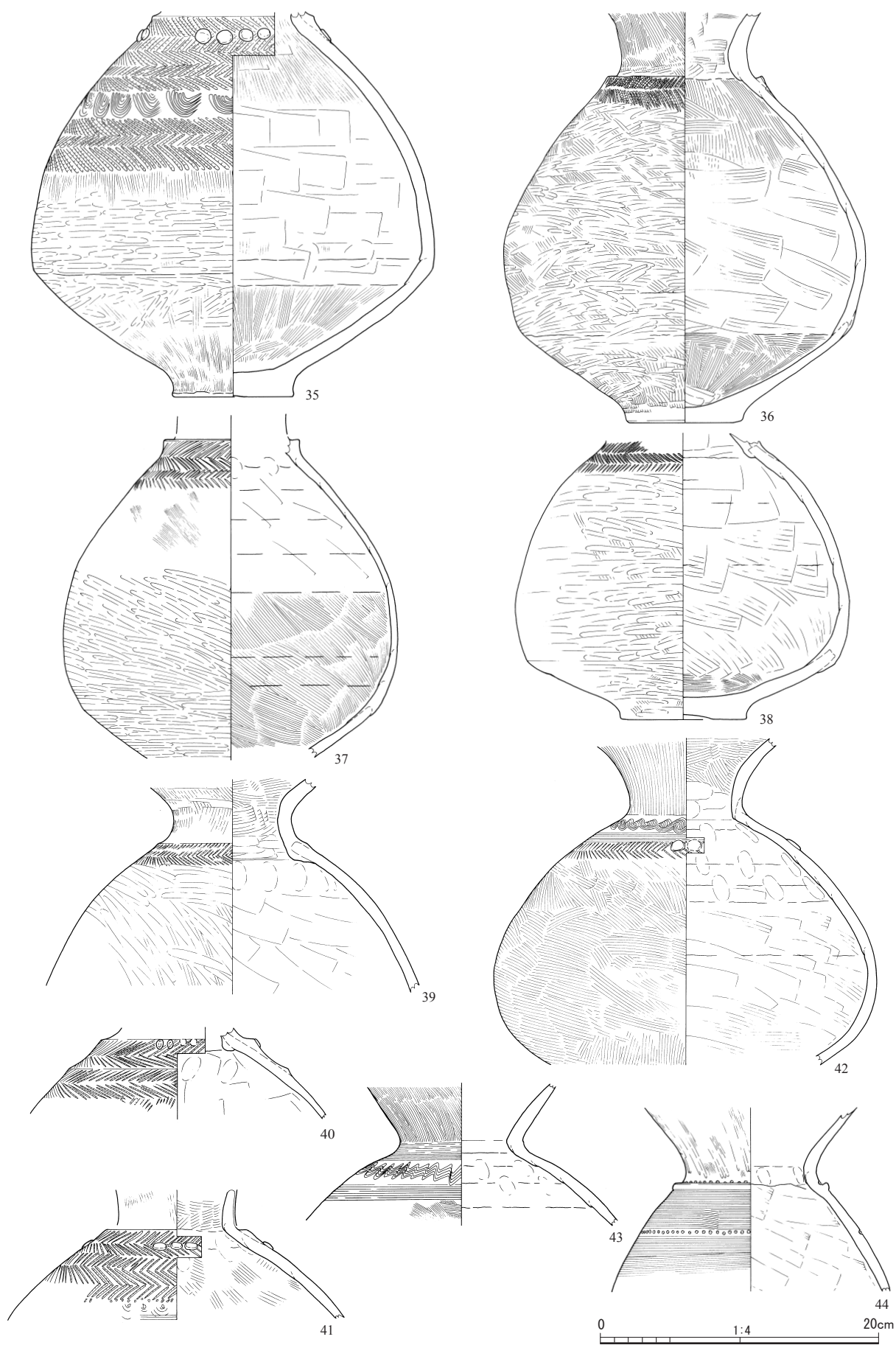


Fig.12 SZ02 出土遺物実測図 (3)

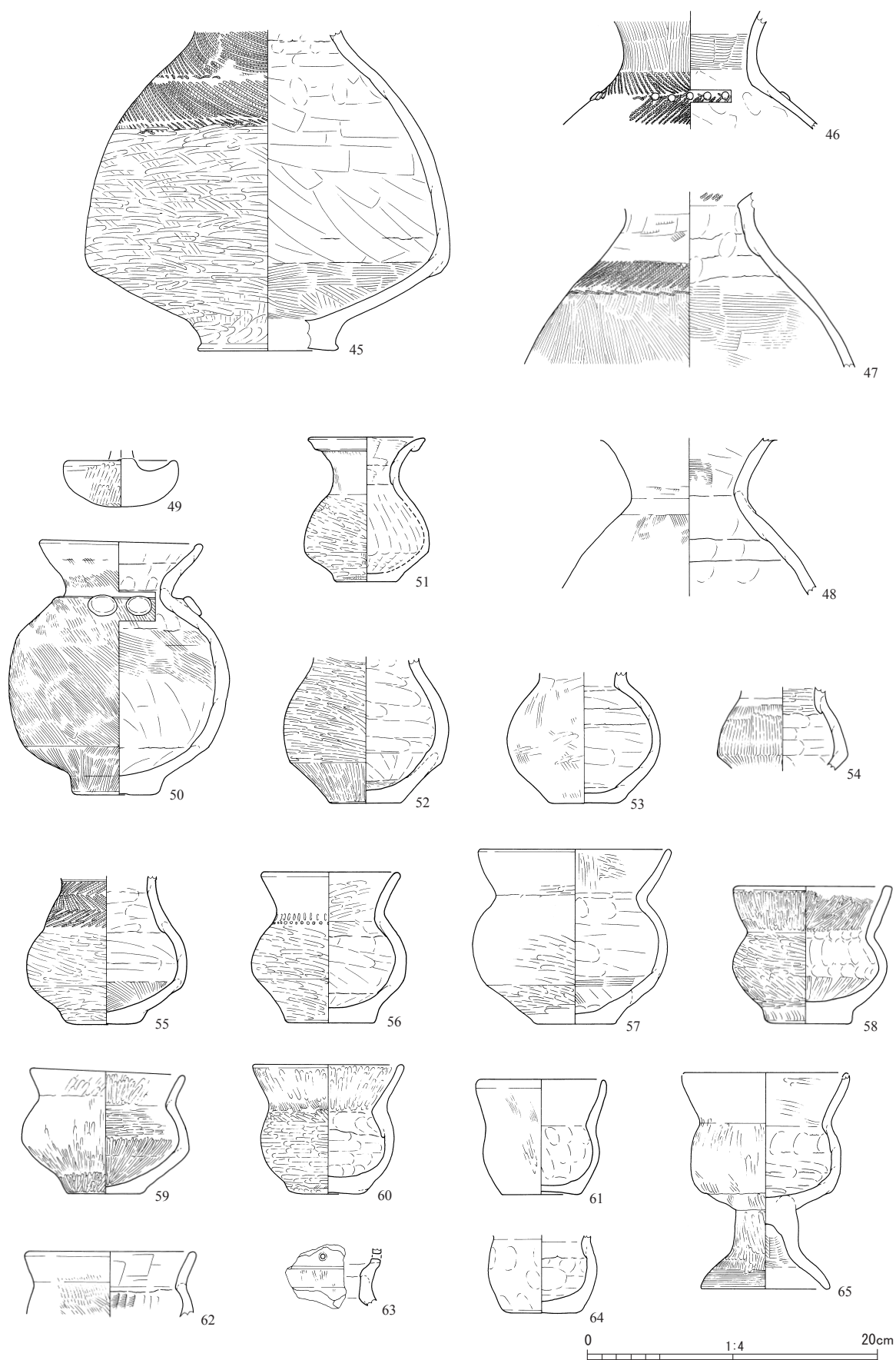


Fig.13 SZ02 出土遺物実測図 (4)

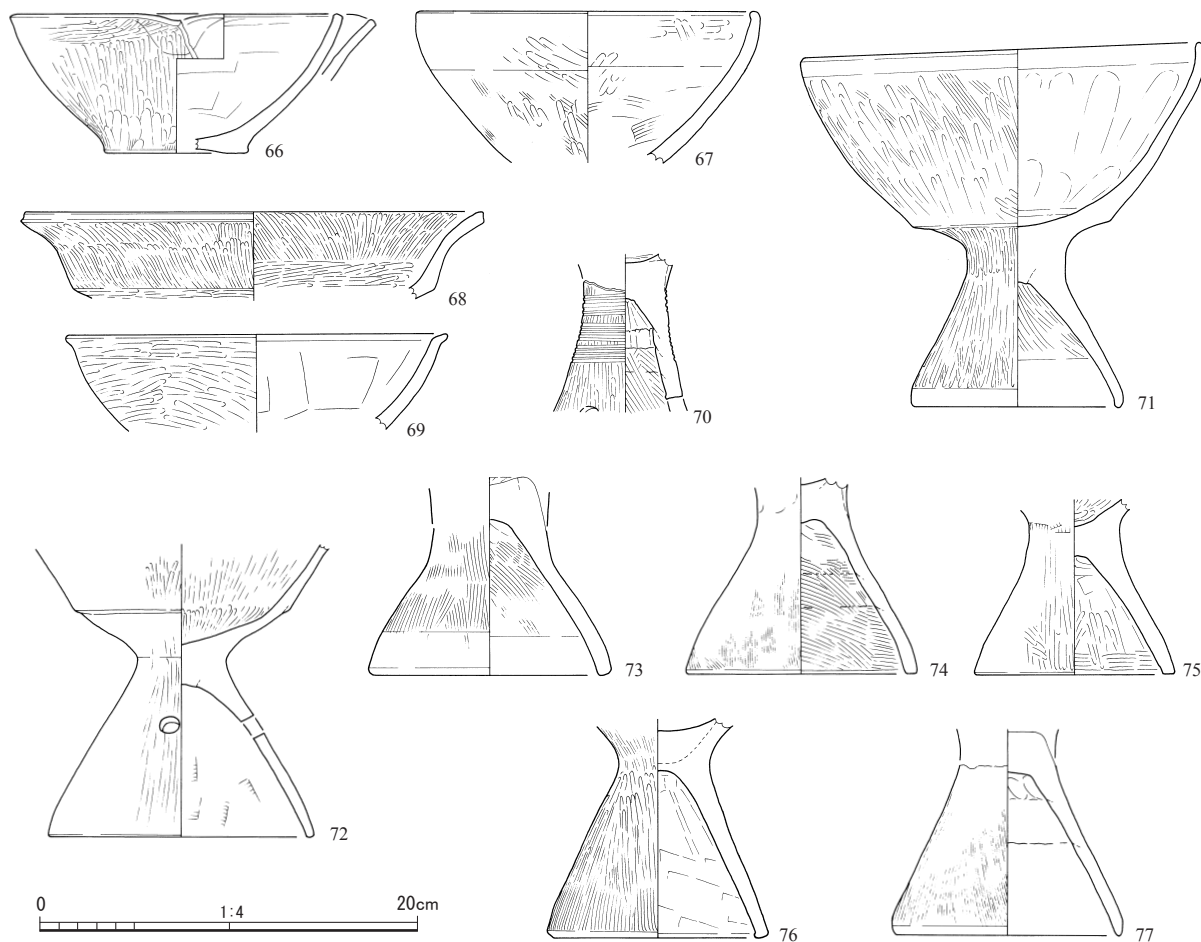


Fig.14 SZ02 出土遺物実測図 (5)

ある 78 ～ 91・93 と刺突がない 92 がある。93 は口径 12.2cm、器高 12.0cm と小型である。94 ～ 120 には甕の脚台部を示した。体部と脚部の接合部に粘土帯がみられる古相なもの (94・95) と粘土帯がみられない新相のもの (96 ～ 120) がある。また、脚台部は、96 のように直線的で相対的に高さがある古相のものと、120 のように短脚で内湾傾向が強い新相のものがみられる。

(4) 小 結

SZ02 は、浜名高校が実施した 1・2 次調査成果を踏まえ、墳丘裾部において計測すると一辺約 13 m の墳丘をもつとみられる。墳丘の外周には最大幅 4 m、検出面からの深さ 0.6 m の周溝を伴う。周溝の平面形は、東側 1 箇所陸橋部を持つ形態であったと想定できる。SZ02 の築造時期は、周溝の初期流入土 (Fig.8-11・12 層) から出土した 43・44 からうかがい知ることができよう。43 は山中Ⅱ～Ⅲ式期の特徴を有するが、44 は欠山Ⅱ式期を中心とした時期の特徴が認められる。方形周溝墓の築造時期は欠山Ⅱ式期を中心とした時期と捉えられる。埋土上層 (Fig.8-10 層) から出土した豊富な土器群は、周溝が 10cm 程度埋没した状態で埋もれたことが明確である。土器の特徴から欠山Ⅱ・Ⅲ式期にかけてのものと捉えられる。この土器群は、出土状況に法則性が観取できない点や完形の遺物がみられない点、スス・コゲの付着や端部の摩耗などの使用痕跡が認められる点から、欠山Ⅱ・Ⅲ式を中心とした時期に、使用済みの土器が方形周溝墓の埋没過程で廃棄されたものと捉えられる。

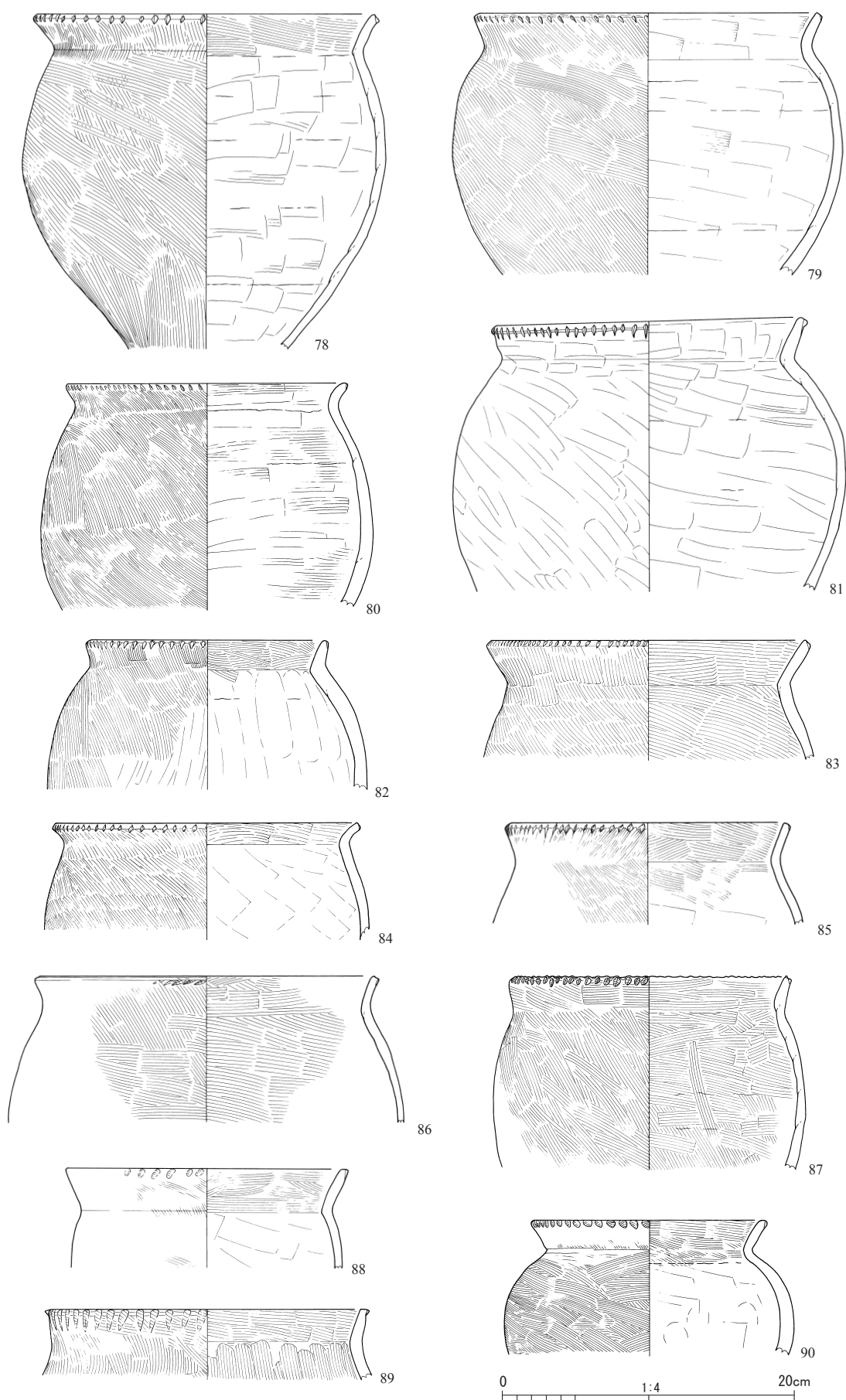


Fig.15 SZ02 出土遺物実測図 (6)

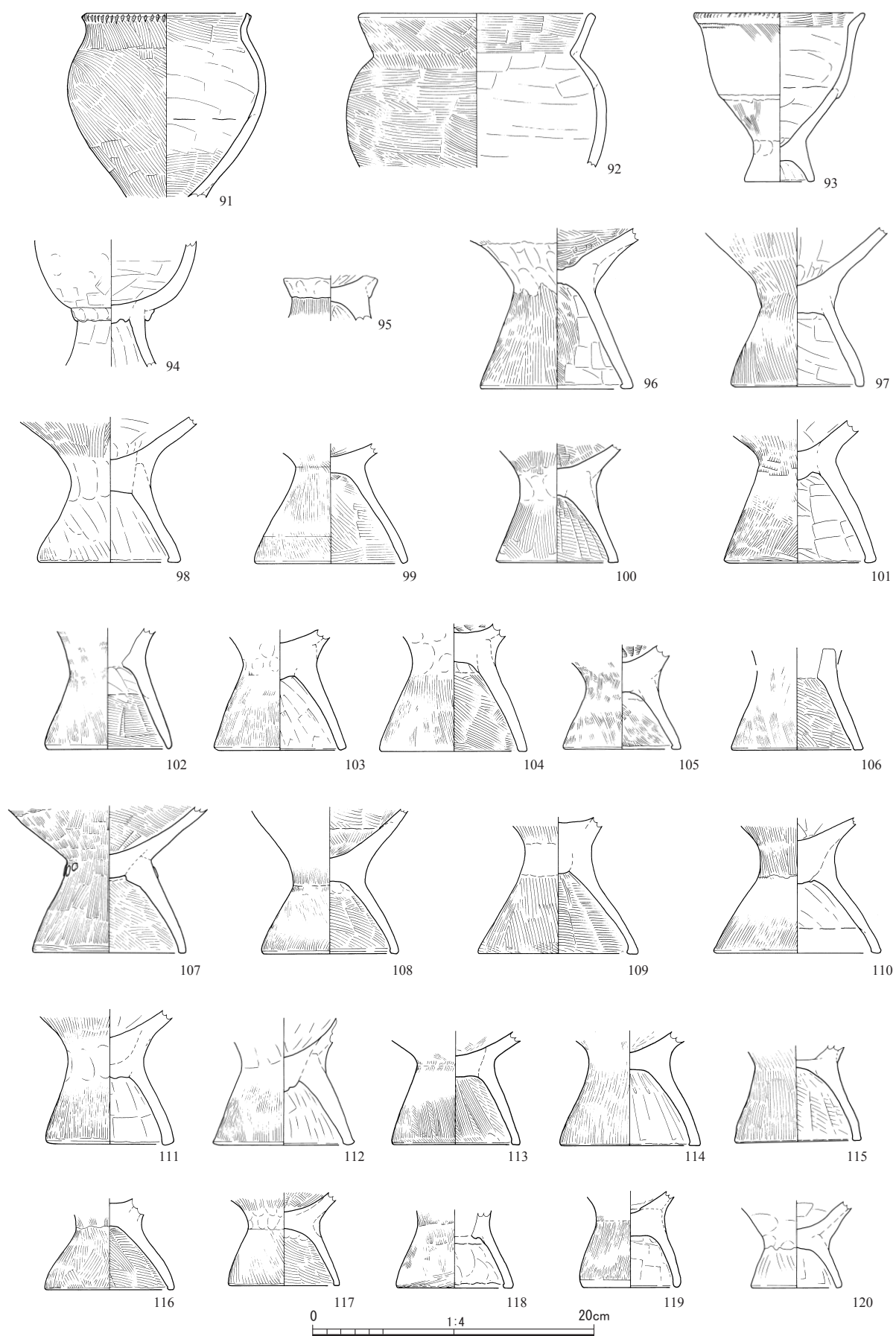


Fig.16 SZ02 出土遺物実測図 (7)

4 その他の遺構・遺物

方形周溝墓以外にも遺物を多く含む溝（SD08）や中世の遺物を含む遺構が調査溝1や調査溝3において複数確認できた。以下、遺構の時期が明確であり、特徴的なものを抽出して報告する。

SD08 SD08は、調査溝1の東端で検出した溝で、遺構埋土は暗褐色粘質土である。検出面で幅1m、検出面から最深部の深さは0.3mである。SD08の南側や北側、東側は後世の地形改変が顕著であり、旧地形を遺していないため遺構の平面形を捉えることはできない。しかし、SD08とその周辺からにおける遺物の出土量の多さや1・2次調査時にSD08の北側から管玉が出土している点を踏まえるとSD08の近傍にも方形周溝墓に関わる遺構が存在した可能性が指摘できる。

SD08埋土からは、弥生土器が複数出土し、そのうち図化が可能な3点を示した。121は、長頸壺である。外面には横方向のハケメがみられ、一部には横線文がみられる。122は、壺の口縁部である。口縁端部には外傾する面があり、複節斜縄文がみられる。123は、台付甕の脚台部で、ほぼ直立した形態である。SD08の時期は、弥生時代後期と捉えられる。

SP01・02 調査溝3の南部において検出した小穴で、小穴の距離は中心間の距離で1.8mである。いずれの小穴もほぼ垂直に掘削されており、検出面における直径は0.4m、検出面からの深さは約0.5mである。埋土からは弥生土器が複数出土したが、いずれも小片であり図示できるものはなかった。SP01・02が西端の柱穴列で、東側へ延びる弥生時代の掘立柱建物が存在した可能性がうかがえる。

SP03 SP03は直径0.3m、深さ0.1mほどの小穴で、遺構埋土は暗褐色粘質土である。遺構内からは、124の土師質土器の羽付釜が出土した。

包含層出土遺物 125の山茶碗と126の磨り石が調査溝3の包含層中から出土した。125の山茶碗は、口径約12cmに復元できる。126の磨り石は全長22.0cm、幅14.0cm、重量2,750gである。片面に凹面を持ち、凹みの内側は摩耗し、滑らかな状態である。

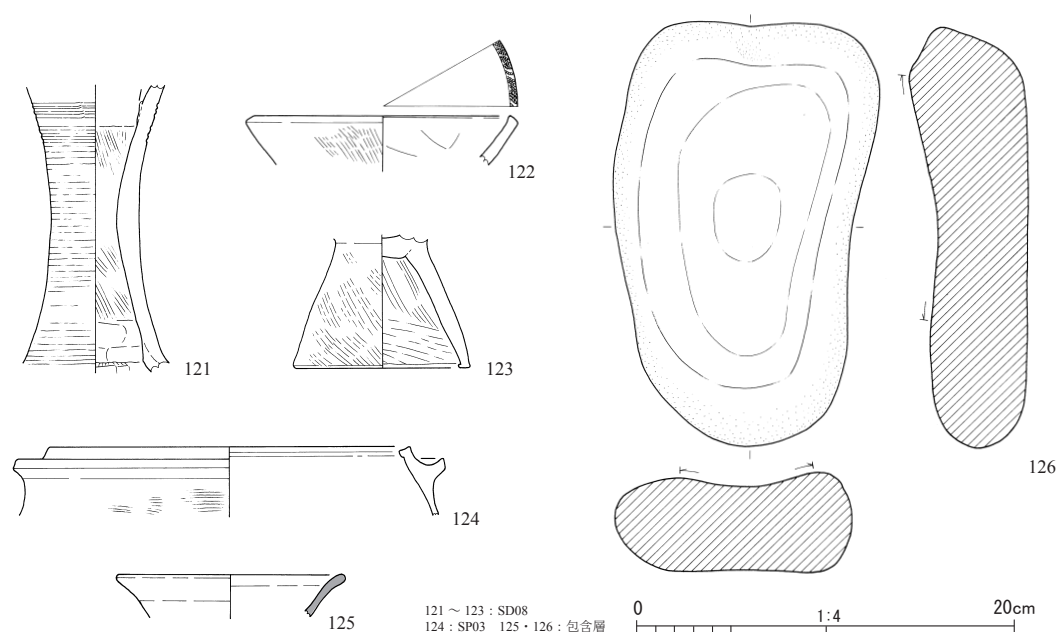


Fig.17 その他の出土遺物実測図（8）

第3章 総括

1 21次調査成果の概要

SZ01 21次調査調査溝1で確認したSZ01は、1・2次調査で検出された方形周溝墓の北側にあたる。墳丘の規模は一辺約12m、墳丘盛土は確認できなかった。墳丘の周囲には最大幅4.5m、深さ0.7m程度の周溝がめぐる。周溝の隅角部のうち1～2方に陸橋が設けられたとみられる。

SZ02 調査溝3において検出したSZ02は、1・2次調査で検出された2号方形周溝墓の北東部にあたる。墳丘は、一辺約13mであり、墳丘の周囲には幅2m、深さ0.6m程度の周溝がめぐる。周溝の東側隅角部には陸橋部が設けられ、北側や西側の隅角部には陸橋が見られない。1箇所もしくは2箇所の隅角部に陸橋部が設けられていたと捉えられる。調査区のほとんどが周溝とその外縁部であったため墳丘盛土の有無は確認できなかった。墳丘の中央部にはSZ02に先行する住居跡(SB01)が確認されている。

SD08 調査溝1の東端で検出したSD08は2基の方形周溝墓と並んで遺物の出土量が多い遺構である。東・南・北の3方が後世の地形改変により失われており詳細は不明であるが、1・2次調査ではSD08の延長方向から管玉が出土しており、近傍に埋葬施設等の方形周溝墓に関わる遺構が存在した可能性がある。

2 21次調査の意義

21次調査地は1・2次調査以降、方形周溝墓が2基展開する地点として知られていた場所である。1・2次調査による方形周溝墓の検出は、方形周溝墓の存在が全国に認知される初期段階にあたり学術的にも重要な成果であった。1・2次調査成果の追認と、2基の方形周溝墓の未調査部分の情報を得たことが21次調査の重要な成果と言える。とくに、SZ02では、東側陸橋部をはじめとした構造が明らかになった点が大きな成果と言える。また、SZ02の周溝から出土した大量の土器は方形周溝墓の周溝がある程度埋没した段階で、使用した土器を廃棄した様子がうかがえ、方形周溝墓のあり方を考える上で重要な情報といえる。

1・2・21次調査地点には、方形周溝墓造営後、住居跡が展開していなことを確認でき、山中式と欠山式の移行期に芝本遺跡の集落と墓域の再編がうかがえる。また、芝本遺跡・東原遺跡において、欠山Ⅲ式期の下る遺構・遺物は認められないことから、SZ02の周溝埋土上層出土の遺物群が、集落終焉の時期と重なる点が注目できよう。21次調査によって、弥生時代後期における天竜川平野北部地域の拠点集落の変遷を明らかにするうえで、重要な情報を得たといえる。

参考・引用文献

鈴木敏則 2004「第2節 後期弥生土器」『梶子遺跡X』(財)浜松市文化協会

鈴木京太郎・松井一明 2007「V章 H地点第1～6次発掘調査報告」『東原遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木一有 2009「第3章 後論 1 鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」

『鳥居松遺跡5次(弥生時代編)』(財)浜松市文化振興財団

(財)浜松市文化振興財団 2008『東原遺跡33次』

(財)浜松市文化振興財団 2011『東原遺跡34次』

※芝本遺跡に関する報告書は、Tab.1に記載

報告書抄録

書名（ふりがな）		芝本遺跡（しばもといせき）						
編著者名		和田達也						
編集機関		浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（053）457-2563						
発行機関		浜松市教育委員会						
発行年月日		2016 年 6 月 30 日						
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しばもといせき 芝本遺跡	静岡県 浜松市 浜北区 於呂	22202	6-03-30	34 度 49 分 29 秒	137 度 47 分 59 秒	2015 年 10 月 19 日 ～ 2015 年 11 月 6 日	204 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
芝本遺跡	集落	弥生時代 鎌倉時代 戦国時代	方形周溝墓	弥生土器 鉄製品 中世陶器 土師質土器		弥生時代後期の 方形周溝墓 2 基を確認		
要 約								
芝本遺跡は、浜松市浜北区於呂に所在する弥生時代後期後半の集落遺跡である。1 辺約 10m の方形周溝墓 2 基が確認でき、周溝埋土からは弥生土器が豊富に出土した。1 号方形周溝墓から出土した鉄製品は、弥生時代後期後半にさかのぼる可能性がある。								

芝本遺跡

2016 年 6 月 30 日

発行 浜松市教育委員会
浜松市文化財課
(教育委員会の補助執行機関)
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

印刷 松本印刷株式会社



SZ01 検出状況（東から）



1 SZ01 遺物出土状況（北西から）



2 SZ01 遺物出土状況（北東から）



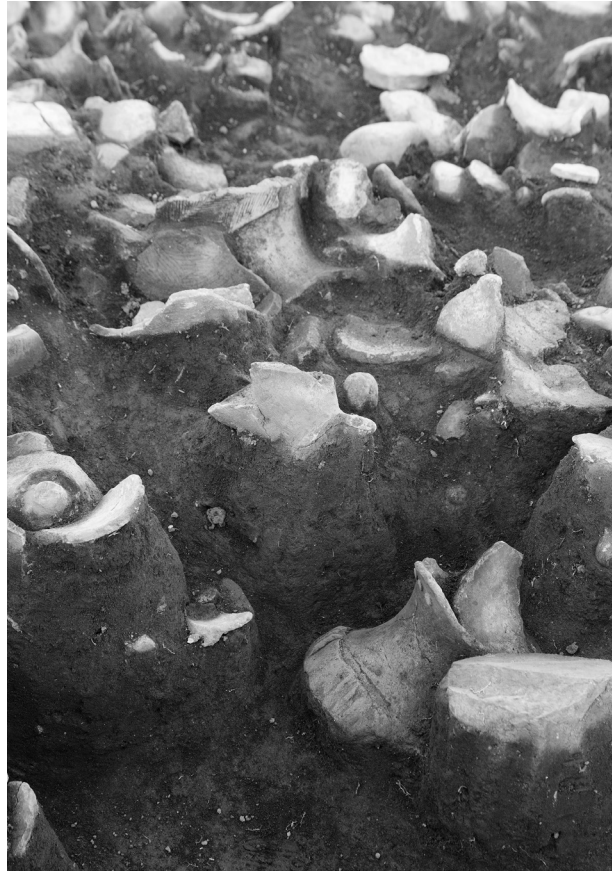
3 SZ01 (SD07) 完掘状況（北東から）



SZ02 検出状況（北東から）



1 SZ02 遺物出土状況（北から）



2 SZ02 遺物出土状況（南西から）



3 SZ02 遺物出土状況（東から）



4 SZ02 遺物出土状況（北東から）



1 SZ01・SD08 出土主要遺物



2 SZ01 出土鉄製品



1 SZ02 主要出土遺物



2 SZ02 出土遺物 (1)



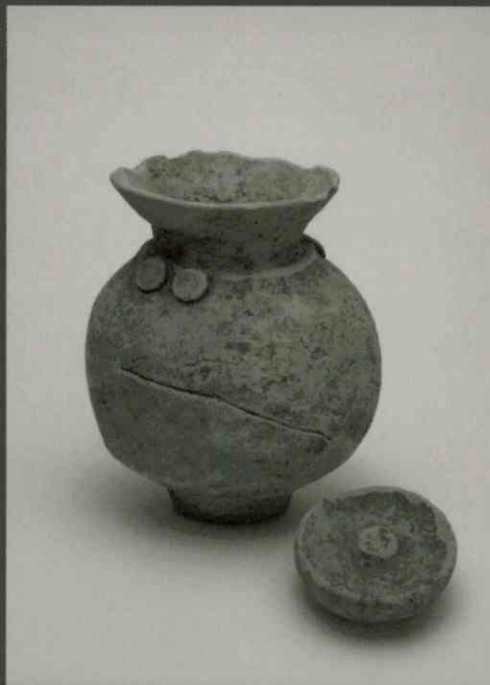
SZ02 出土遺物 (2)



Shibamoto Site

The 21st excavation report

A Report of Archaeological Investigation
on 2nd Century tumuli in Western Shizuoka Prefecture, Japan



June, 2016

Hamamatsu Municipal Board of Education